



Contents

- ▶ **巻頭言**
- 「写真を聴いてください」 1
- ▶ **特集**
- エコさん追悼集 2
- ▶ **プロジェクトレポート**
- ウクライナ避難民支援 6
- トルコ・シリア地震 7
- ▶ **CODE未来基金NEWS**
- 「若者がみた被災地」 8
- ▶ **イベントレポート**
- 報告会の開催 10
- 新入生歓迎キャンプ 11
- イベント告知 12
- ▶ **スタッフ活動記録**
- ▶ **会員・寄付者ご芳名** 14
- ▶ **活動へのご協力をお願い!** 16

巻頭言「写真を聴いてください」

1995年1月17日、両親が住む神戸市長田区の下町は炎に包まれ、その灰は舞子に住む私の家にもまるで雪のように降り注ぎました。いたるところが陥没し、倒壊した建物が行く手を塞ぐ道に、車を乗り捨て長田に向かったのがつい昨日のようです。ただ当時の私は、被災地のまっただ中にありながら、被災者の救援、復興の支援は人に任せ、それよりも日常業務の遂行、継続を最優先していたように思います。

私にとっての本当の意味での災害支援(について考えるきっかけ)は、2008年に発生した中国四川省大地震でした。支援団体から送られてきた1枚の写真を見たとき、思わず目頭が熱くなり、人として何かできないかと思うようになったのです。

その写真は、粉塵まみれの高齢の女性を背負った日本からの(と思われる)救援者が写っていました。彼の顔も埃にまみれて真っ黒で、苦しさが悲しさが顔は大きく歪んでいました。まっすぐ前を見据えた目には涙が浮かんでいますが、歯を食いしばり、前へ進む姿からは、理不尽な出来事に対する憤り、そしてそれをエネルギーに変えるような力が宿っていました。言葉の違いも文化の違いも立場も関係なく、人としての使命感が伝わってきました。その写真には「写真を聴いてください」のメッセージが添えられていました。私の耳には「それで、あなたはどうするのか」という声が聞こえたのです。

CODEは阪神淡路大震災を契機に発足した阪神大震災地元NGO救援連絡会議を前身とし、2002年1月17日にNPO法人として歩みをはじめました。これまで多くの災害現場で「最後のひとりまで」の理念を胸に、「寄り添いからつながりへ」人間復興となる救援を実践してきました。トルコ・シリア地震においても、KOBELの記憶を胸に被災者に寄り添い、共感し、思いを共有しながら支援活動が行われています。そこから発信される情報、現地の写真からは多くの声が聞こえてきます。

毎年1月17日には三宮の東遊園地で阪神淡路大震災の追悼行事が行われます。2023年は「むすぶ」の文字が灯籠に浮かび上がりました。国籍、宗教、文化を超えて世界中の人が結ばれる年となったのでしょうか。2024年はどのような文字が浮かび上がるのでしょうか。世界中の人に幸せが届けられる、そのような年になることを心から祈ります。

(CODE理事/神戸YMCA 西田勉)

エコ プラウオト

追悼: Eko Prawotoさんを偲んで・・・

2023年9月13日、エコ・プラウオトさん(享年65歳)がご逝去されました。長きにわたりCODEと共に災害復興の道を歩んできました。心よりご冥福をお祈りいたします。



エコ・プラウオト

(デュタ・ワチャナキリスト教大学教授、建築家、アーティスト)
1958年ジャワ島生まれ
ガジャマダ大学で建築を学び、その後、著名なインドネシア人建築家のYB Mangunwijaya(ロモ・マンゲン)氏に師事する。2006年インドネシア・ジャワ中部地震後にCODEと出会い、竹など現地の自然素材や伝統文化を尊重した建築を使った被災地での住宅再建を行った。2018年のロンボク島地震やスラウェシ島地震津波、スンダ海峽火山津波などでもCODEや現地建築家と共に復興支援に尽力していただいた。また、大学で建築やアートを指導する傍ら、海外の芸術祭などにも作品を出展してきた。晩年は、ジョグジャカルタ近郊の貧困地区でコミュニティ開発を住民と共に進めていた。

【エコさんとCODEの関わり】

- 2006年5月 ジャワ中部地震
 - 6月 ジャワ中部地震第1次派遣(吉椿、岡部)
 - 7月 ジャワ中部地震第2次派遣(村井、横山)
 - * エコさんと村井前事務局長との出会い
 - 9月 ジャワ中部地震第3次派遣(村井、横山)
 - * エコさんと耐震住宅再建プロジェクト
 - 11月 ジャワ中部地震第4次派遣(村井、横山)
 - 12月 ジャワ中部地震第5次派遣(村井、横山)
- 2007年8月 CODE ウォータープロジェクト開始
 - * エコさんがカウンターパート
- 2008年 エコさん夫妻日本に1か月滞在
- 2010年～ JICA草の根技術協力事業(支援型)で
 - 地域経済基盤強化事業
- 2010年10月 ムラピ山噴火
- 2010年7月 ウォータープロジェクト視察(村井、岡本、西)

- 2014年 ジャワ島訪問(村井、多田)
- 2015年 JICA草の根技術協力事業(支援型)で女性が担う
 - 地域力向上事業
 - * 被災地NGO協働センターの事業(村井、増島)
- 2018年7月 ロンボク島地震
 - 10月 ロンボク島地震第1次派遣(上野、増島)
 - * エコさんと現地視察し、木造建築のプロジェクト
- 2018年9月 スラウェシ島地震津波
 - 11月 スラウェシ島地震津波第1次派遣(吉椿)
 - * エコさんに現地建築家を紹介してもらった。
- 2018年12月 スンダ海峽火山津波(吉椿)
- 2019年1月 スンダ海峽地震津波第1次派遣(吉椿)
 - * エコさんに建築家協会の方を紹介してもらった。
- スラウェシ島地震津波第2次派遣(吉椿)
 - (伝統建築のコミュニティスペース再建)
- 2020年1月 世界語り継ぎフォーラムでエコさん夫妻来日

テレジア・クシャルディーニ

2023年9月13日(水)、エーコ・アグス・プラウオト(エコ)さんの訃報を聞き、私は驚いた。マンゲンウイジャヤ神父(ロモ・マンゲン)は、私にエコさんを紹介してくれました。彼はロモ・マンゲンの弟子であり、彼の建築助手でもあった。彼の建築スタイルは、疎外されたコミュニティを優遇するロモ・マンゲンの精神を踏襲している。ロモ・マンゲンは建築作品の中で、多面的な人生における人間の闘争の小さな断片を表現した。ロモ・マンゲンは、色を組み合わせる天国のような虹を作ることに成功した。ロモ・マンゲンの建築は庶民のため、そして人間として成長するために環境を整えた住宅を提供することを優先しなければならない。エコさんの建築は、ロモ・マンゲンの著書『Wastu Citra』(Gramedia, 1970)で説明されているロモ・マンゲンのビジョンに忠実である。「ワストウ」とは、真理(verum)、美(pulchrum)、善(bonum)を求め、闘う人間の創造を駆り立てる魂や創造的精神を意味する。これらは、善、美、正義のイメージとして彼の傑作建築に表現されている。

ロモ・マンゲンが亡くなって7年後、パントウル県を含むヨヤカルタとその周辺地域を大規模な地震が襲った(2006年)。パントウル県での復旧・復興プロジェクトに、私とエコさんは協力して対応した。

プロジェクトのひとつは、パントウル県ポト・ケンセン村で実施された。このプロジェクトはCODE(国際災害救援、神戸に本部を置くNGO)の資金援助で実施された。このプロジェクトは他の県、すなわちKulonprogoとGunungkidulにも拡大された。この連帯プロジェクトは、単に家を建てるだけでなく、被災者のニーズに基づいて他の介入も行った。

ロモ・マンゲンとの出会いが、エコさんを最も創造的なアイデアに駆り立てた。人間の感情や思考プロセスの浮き沈みはひとつの単位であり、宇宙や被造物と密接に一体化した制御された部分ですらある。

建築言語を含む言語の偉大さの証は、その誠実さ、純粹さ、あるいは偉大な思想家トマス・アキナスの言葉「Pulchrum splendor est veritatis(美は真理の発露である)」である。それ以上に、家やその他の建造物は、私たちの精神や感情を映し出す「イメージ」であり、「光」である。そのシンプルさと純粹さは、すべての人間の心を強くする。家は私たちが使うためのものですが、それ以上に、家は私たちの人間としての尊厳を映し出し、表現するものなのです。私は、この精神を私たちの友情の瞬間として持ち続けています。江湖さんのご冥福をお祈りします!

Diniさん(エコさんの助手)

翻訳: CODE学生スタッフ 島村優希)

僕がエコさんとはじめて直接にお会いしたのは2018年のロンボク島地震津波の時でした。調査に入った村の方からココナッツをごちそうになっていた時だったと思います。それ以前にもメールやチャットではやり取りをしており、熊本地震の際には真先に九州の人たちを心配するメッセージを送ってくれました。調査に合流したエコさんは村の人とも雑談しながらすぐに打ち解けて、ラフで話しやすい人だなという印象でした。視察で建築物を見るときは視野が広く、プロジェクトの話をするときには住民のお話をとくに生活や住む人の気持ちまでしっかりイメージした提案をいただきました。

コロナ禍に入る直前に来日された時がエコさんと最後にお会いした時になってしまいました。エコさんご夫妻と一緒に神戸の仏具屋や長田の被災地域を回りました。日本の仏具を楽しそうに見て回る様子、車の中からでしたが長田の街を見ながら村井さんから靴づくりや長田とケミカルシューズの歴史、震災復興について熱心に質問する姿に感心しつつ、通訳がとても大変だったなということを感じています。

この文を考えながら、エコさんと直接お会いした数はそんなに多くはないですが、お話しした時間はとても濃かったなと思い出します。エコさんに心から感謝し、ご冥福をお祈りします。

(元CODEスタッフ 上野智彦)

エコさんとの思い出で1番印象に残っているのは瀬戸内・上勝訪問に同行案内させていただいた時です。とにかくどんな人に対しても、全く偉そうぶることもなく、無駄に謙遜し過ぎることもなく、常に落ち着いてニコッとされてました。要人の案内の一部を任せられた若造としては、最初はやはり緊張しますが、出会って挨拶をした途端、素の自分に返させてくれる魅力がエコさんにはありました。最後の夜、空港近くのホテルで「明朝、フロントから空港行きの直行バスが出るから乗ってね、おやすみ、さよなら!」と匙を投げるようなコーディネート案内にも、最後までニコニコ、「OK!」と返してくれました。国際的な支援を行う時は、異文化の理解が最大限求められ、「違い」に注意することが多いかと思いますが、カウンターパートや被災者が「同じ」人間である、ということを実感できるかは大きいかと思います。自然や災害やいのち、国際も国内も無いわけです。「違い」を尊重できるのはまず寄り添って同じ目線に立ってから。エコさんは出会った瞬間に、緊張でガチガチだった自分に教えてくれた気がします。被災地に立つエコさんの姿に救われた若者は多分相当いると思います。

サンキュー、エコさん! (元CODEスタッフ 尾澤良平)

インドネシアのエコさんが亡くなった。65歳だった。エコさんは遠くインドネシアにはいても、いつも近くにいるような存在だった。

エコさんとは、2006年のジャワ島中部地震後に出会った。建築家／アーティストであった彼は、いつも素晴らしい思想と発想で被災地の復興についてたくさんの学びと気づきをいただいた。

インドネシアで災害が起きるとすぐにエコさんに連絡を取り、すぐに情報や現地の建築家などを紹介してくれた。会うことも優しいまなざしで「中国の被災地はどうか?」と他の被災地のようすを気にかけてくれる。

最後にお会いしたのは、コロナ直前に「世界語り継ぎフォーラム」(神戸)で共に登壇した時だった。エコさんから「神話や伝説を使った語り継ぎ」や「すべての意思決定は地元が行うこと」などを教えていただいた。その後もオンライン国際会議「IACCR」でも、コロナ禍の学生たちの伝統を復活して素晴らしい取り組みを紹介してくれた。

エコさんが先に逝ってしまった事はとても悲しいが、彼の思想や哲学をかみしめながら今後も活動していく事を胸に刻みたい。エコさん、どうぞ安らかに。(CODE事務局長 吉椿雅道)

「こんな風にゆっくり沈んでいく夕日をみながら村でお茶を飲む、この時間が人生の日々を豊かにするんだね」と、静かにエコさんが語っていたMbotto Kenceng村での夕暮れが目に浮かびます。

エコさんとの出会いは、2005年ジョグジャ地震後の復旧時でした。CODEが見つけた新聞記事をもとに辿り着いた竹建築の専門家エコさん。とても有名な方だったのに驚くほど気さくに対応して下さる日々の中、エコさんの人としての大きさを感じました。

復旧時対応の仮設でなく、長く使えるバンブーハウスプロジェクトとなり、現地の相互扶助文化を活かしながら、村のみならず公平に屋根や壁や窓、を配給していく姿が印象的でした。

効率を重視する生活で生きている私たちにとって、たとえ時間かかっても公平に分け合う文化は自然と調和する村の中に溶け込んでいました。

村の方々の声を最優先するエコさんとそのチームの皆さんから、このプロジェクトを通じてたくさん学び、あの村での時間は、確かに私の土台を固めてくれます。

エコさん、素敵な日々をありがとう!

(元CODEスタッフ 横山葉子)

今回、エコさんといつ頃初めてお会いしたか、記憶をたどるため過去の資料を掘り起こすことから始めました。過去の紙資料がすぐに出てきませんでしたが、自分のSNSの日記にエコさんと初めてお会いした日の記録が残っていました。

2008年1月16日に関西空港に村井さんと迎えに行った際、エコさんと初めてお会いしました。エコさんが1か月ほど日本に滞在している間、大学院の講義等がない時は通訳や案内役として奈良や能登などに同行した。エコさんは私がジョグジャでお世話になった文化財関係者の方もお知り合いで、初めてお会いしたのに、共通の知り合いの話が出来ることに驚いたことを覚えています。エコさんの村には行ったことがありませんが、私も数回ジョグジャに行っていたこともあり、英語を通じ、被災文化財、インドネシアの事などについてもお話をしました。

私の通訳する内容や話を一生懸命聞いてくださったと記憶しています。直接お会いした日々はそんなに長くはありませんでしたが、今も私の記憶の中のエコさんは優しい穏やかな笑顔をしています。

正直、もう直接会えない気がしません。何故ならSNSで今でもエコさんの投稿に触れることが出来るからです。エコさんの絵、写真などはとても美しいものばかりでした。インドネシアに、ジョグジャにまた行きたい、エコさんにまた会いたいと思いつけてきたので、さみしいです。ご冥福をお祈りします。

(元CODEボランティア 法化図知子)



村井理事と徳島県上勝町を訪問

特集

エコさんと共に・・・村井雅清(CODE理事)

去る9月中旬、元CODEのスタッフだった横山葉子さんから訃報が届いた。インドネシアのジョグジャカルタ(以下「ジョグジャ」と略す)に住む「エコ・ブラウトさん」が亡くなったの知ってる？FBに流れていた・・・と。実は亡くなる少し前に、私はエコさんにMessengerで、「今、石川県の能登半島の先端の珠洲市で“奥能登国際芸術祭”を見に来ています。能登には2007年の地震後、エコさんと一緒に来ましたよね。私はいま、その能登にいます」と伝えた。エコさんの返事は、「能登にいるのですか・・・！私も行きたいな。でも村井さん、私はいま、腫瘍が見つかり病院に入院しています。検査を受けているのです。」というお返事だった。残念なことに、訃報が届くまでそれほどの時間は経っていません。



(瀬戸内国際芸術祭)



(奥能登国際芸術祭)

エコさんが教鞭をとっている「デュタ・ワチャナ・キリスト教」大学の関係者に連絡をとったところ、ちょうど大学葬を執り行っているところで、そのリアルな模様をYouTubeで送ってくれたので、しっかりと見ることができた。

39年連れ添ったお連れ合いのRinaさんはエコさんが眠っている棺から離れない。憔悴されたお姿を見て、その場に私がいなくても、声はかけられなかっただろう。

のちにRinaさんとの会話で「エコさんは、素晴らしい夫であり、父親であり、祖父でした」というメッセージが届いた時には、言葉では表せないほどの寂しさを日々感じながら、「喪の時間」を過ごしておられるのだなあと思った。



(2人のお孫さんを抱くエコさん)

ー1枚の新聞記事が出会いー

さて、そもそも私とエコさんとの出会いは、2005年のジャワ地震だった。第二次派遣で現地視察に行った時、地震に強い家を作ることを現地で普及するために、しなやかな竹素材を使った家が建てられないかと思っていた。何故なら、この地震で多くの建物が倒壊したが、インドネシアの伝統的な住家はほとんど壊れていなかった。しかも、日本の伝統建築では、竹小舞の上に土を何層も乗せた土壁が地震には強く、大きな役割をしていたことを思い出させるほど、

この壊れなかったジョグジャの伝統建築の壁には、竹を編んだ壁をふんだんに仕込んであることが目についた。きっと竹素材を駆使した住家なら地震でも大きな損傷はないだろうと確信した瞬間だった。



(竹を編んだ壁の家)

その後、第三次派遣で、ジョグジャにある国立ガジマダ大学で建物再建についての議論がなされていたので話を聞きに行った。そこで神戸大学の建築学科の教授に出会い、彼らは竹を使った仮設住宅を提案されていた。それは見るからにあまりにも頑丈な竹仕様の仮設住宅だった。「ヨシ！竹は建築素材として使えるだろう」と心強くなった。

やがて第三次派遣から帰国し、事務所で朝日新聞を見ているとある日の人欄に「しなやかな防災」という見出しで、竹にぶら下がったエコさんの写真と「竹やしなやかな素材で造られた家に住んでいたら、もっと多くの人が助かったらろう」というコメントを載せた記事を見つけた。運命的な出会いをプレゼントしてくれたとのだろう。この記者には感謝！



(平成18年6月24日朝日新聞記事「しなやかな防災」)

私は迷わずこの人に会いに行こうと決心をし大学に会いに行きました。CODEのジャワ地震救援プロジェクトは、エコさん設計の耐震の住まいを建てることになったことはいまでもない。

ー災害支援の基本を学ばせてくれたエコさん！！ー

耐震建築プロジェクトのフィールドは、Mboti Kenceng Village (ボトクンチェン村)で行われた。エコさんの設計は、素材やデザインが素晴らしいだけでなく、ジョグジャでは、「ゴトン・ロヨン」(相互扶助)という被災者自身が地域のみならず協力して簡単に建てることで、地域の絆が強くなるという文化がある。また、その土地に群生する竹やヤシの木

を使うことで、自然環境を破壊することはない。まさに循環型のエコな住まい方ができる。

加えてもう一つの特徴は、家の構造はみんな同じだが、間取りは自由にするということと、それぞれが家の外壁には色を塗りましょうと提案された。実は、色を塗るとするのは特別の意味があったことを、私は知らなかった。「エコプロジェクト」と名付けたが、間違っていた。(Diniさんの追悼文を参照)



(code川のバンブーハウス)



「ゴトンロヨン」(相互扶助)と地域資源を活かした伝統工法の耐震住宅建築家エコさんとの「エコプロジェクト」



(エコプロジェクト)

エコさんに「今後の村の再建では、どのようなことを考えていますか？」と尋ねたら、「地震後の被災地には、海外からコーラやジュース、水と大量に入ってきた。食べ物もプラスチックに入った菓子パンや弁当がたくさん……。これでは地域の経済が破壊される。地域の経済を豊かにすることを考えなければならない。」と言われた。この地域の区長スギマンさんは、「なまずの養殖を地域経済の柱にしたい。」と構想を描いていた。「家を建てるのではなく、人々の暮らしが豊かになる住まいを建てるのだ」ということは、阪神・淡路大震災でも学んだことを思い出させてくれた瞬間だった。残念ながら、年が明けた正月に区長の「スギマンさん」は急死された。笑顔のスギマンさんには、訪問する度に癒された。

ーエコさんの師匠は、「ロモ・マンゲン」ー

ある時、エコさんはジョグジャを流れる「code(チヨデ)川」に連れて行ってくれた。偶然だがこの川の名は当NGOのCODEとスペルが同じだったことにビックリした。それで、エコさんは私をここに連れてきたのかと思いきや、まったく違っていた。この川の片側はスラムのようになっていて、過去にはこの住民は段ボールに身を包むように暮らしていたと言われた。今は、竹の家が所狭しと建ち並んでいて、竹に色を塗って実にカラフルで圧巻だ。家の外壁にカラフルな色を塗ることに、次のような意味があることを知った。それは「色を組み合わせると虹を作る」という師匠のロモ・マンゲンさんが言った言葉だった。ロモ・マンゲンは『Bamboo House』という本を上梓された。色を塗るのは、「家やその他の建造物はイメージであり、私たちの精神や感情を反映する光です。それを構築する私たちの人間的で美しく、壮大なすべてを表現するシンボルです」ということをのちに知るのだった。

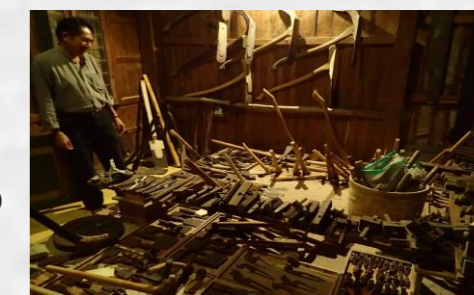
ー親愛なる妻 Rina&エコさんご夫婦との会話が始まった？ー

エコさんが亡くなったあと、「エコさんが使っていたスマホはまだ繋がっているのですか？」とRinaさんにMessengerで送ってみた。しばらくしてRinaさんから「つながっているよ！」と返事が来た。実は、ご夫婦が一度1週間ほど当NGOの狭い畳の部屋で泊まれたことがあった。当NGOにも庭があり、観音様も建立されているのが気に入られたようで、いつも私が出動してきたときには二人は庭を眺めながら、ゆったりと朝の「ひと時」を過ごされていた



(エコさんとRinaさん)

その後、ご夫婦はジョグジャで広い敷地を持つある村の一角に引っ越しをされた。ここで、エコさんは農業や漁業従事者の仕事の道具や生活用品を集め、その一つひとつの「ミニチュア」を作って、敷地の中の一室で展示されていた。エコさんは「こういう貴重な道具や生活用品を何らかの形で残さなければならぬ！」とおっしゃった。



(ミニチュア)

エコさんは、師匠ロモ・マンゲンさんから教えられた建築家としての壮大なる作品を、この新天地でRinaさんと造ろうとしていたのかも知れない。Rinaさんは、「彼はインドネシアの建築は農業に根差していると。これは彼が旅の途中で学んだ哲学です。最後の闘病中でも、彼はそれが自然や宇宙の仕組みを理解するプロセスの一部だ」と言っておられました。エコ・アグス・ブラウト師 最終章になってしまったね あまりにも早すぎる・・・。

(CODE理事、被災地NGO協働センター顧問村井雅清)



(葬儀のようす)

- 水色の枠線.....切れてはいけない要素(文字やロゴ等)をいれる範囲
- ピンクの枠線...仕上がりのサイズ
- みどりの枠線...フチなし印刷にする場合、背景を伸ばす範囲

★★★PDFに変換して入稿される場合★★★
 「表示」>「スライドマスター」画面より色つきのガイド線を消してから変換してください

冊子のデータ製作について

- ・ページ数は表紙も含めた数になります
- ・データは1Pごとでも見開きでもご入稿頂けます
- ※見開きの場合はページ順どおりにご作成ください
- ・白紙のページがある場合はコメント欄にご指示ください

ウクライナ避難民支援



旦那さんをウクライナに残し、女性一人でOさんがお子さんのLちゃん(当時2才)の子育てをする中の「一週間誰ともはなせず、家にいました！」というつづやきがきっかけとなり、学生での子守ボランティアが始まりました。ボランティア中ダンスや習字に行かれたOさんが帰ってきて「楽しかったー！」と少しすっきりした表情をされていたことを良く覚えています。同時に、毎週学生を暖かく出迎え、子守をする中でウクライナや戦争、子育てなど様々なことをお話できたことが学生にとっても大いに学びになりました。

戦争から一年以上たち、ウクライナに帰るか日本に残るかという揺らぎの中で、8月1日にOさんとLちゃんは帰国する決断をされました。帰国されてから、ご家族との写真と共にウクライナに戻れてうれしい反面、ミサイルの砲撃が近くにあったということ、安心な日本に戻りたい気持ちもあるという複雑な心境があるそうです。

今回Oさんから学生に向けてメッセージを頂きましたが、その際も近くの攻撃で子どもが亡くなったことやネットが遮断され普段とは違う回線を使っていると話していました。私達は、まだ戦争が続いているということ、その災禍にある一人一人の方々の想いつづけなければいけないと感じます。(島村優希)

Codeのような組織に出会えたのは本当に幸運でした。私達をサポートしてくれた学生たちは、聡明で思いやりがあり、大きな優しい心を持った若者たちです。大変な時に助けてくれる人がいると幸せです。学生がいなかったら、小さな子供を持つ外国人として、日本に来るのはもっと難しかったでしょう。そして、村井さんや吉さんのような優しい心を持った人を思い出したいです!!! ご心配とご支援を賜りまして、誠にありがとうございます。私はいつもあなたのことを心の中で温かく思い出します。(Oさん)



Oさんお元気でしょうか。日本を出発してから数カ月経ちますが、Lちゃんと遊んだり、Oさんと色々なことを話せたことは、改めて貴重なものであったと実感しております。OさんとLくんがご無事であり、そして戦争がこれ以上深刻なものにならないでほしいと日々祈っております。どうかご無事であってください。(関西学院大学 真野亜裕子)



Oさん、Lちゃん、お久しぶりです。2人と初めて会ってからちょうど1年になり、連絡を取りたいと思っていました。メッセージを送ることができて、とても嬉しいです。お家に行ったのは回数だけでしたが、Oさんとお喋りしたり、Lちゃんと遊んだりした時間はとても楽しかったです。お別れのときにOさんが空港でくれたピアスは大事に使っています♡

戦争のニュースやウクライナのことを聞くたびに、OさんとLちゃんのことが思い浮かび、心苦しくなります。戦争が終わり、ウクライナの人たちが平和に暮らせるようになることを心からお祈りしています。

今のウクライナはとても寒いと思うので、体に気をつけてください。OさんとLちゃんにまたお会いできたら嬉しいです！(関西学院大学 植田晶菜)



Oさん L君 お元気ですか？

お二人が帰国された後、子守に行っていた毎週日曜日の夜はいつもお二人のことを思い出します。子守に行っていた半年間、L君の元気とOさんの優しさにいつも励まされました。それと同時に母国での状況に悲しむOさんの表情を見て自分自身にやるせなさを感じることもありました。

私の一番の思い出はOさんの作ったボルシチを頂いたことと淡路島に遊びに行ったことです。あんなに美味しい料理があるのかと衝撃でした。また行きも帰りも淡路島で一番見どころの明石海峡大橋を渡る時にLev君が爆睡しているのも衝撃でした。

この前、日本民謡でOさんと一緒に踊っていた友人とお二人は大丈夫なのだろうかと話していました。時々メッセージでやり取りするとお二人共無事なことに少し安堵します。L君が世界地図を見て日本を指差し「Kazukiはここに住んでいる」と言っていると知って泣きそうになりました。

お二人を通して、人を思いやる心、辛くとも大切な人のために生き続ける力を学びました。一刻も早く平和が訪れることを心から願っています。また絶対会いましょうね!!!(関西国際大学 樋上和樹)

トルコ・シリア大地震

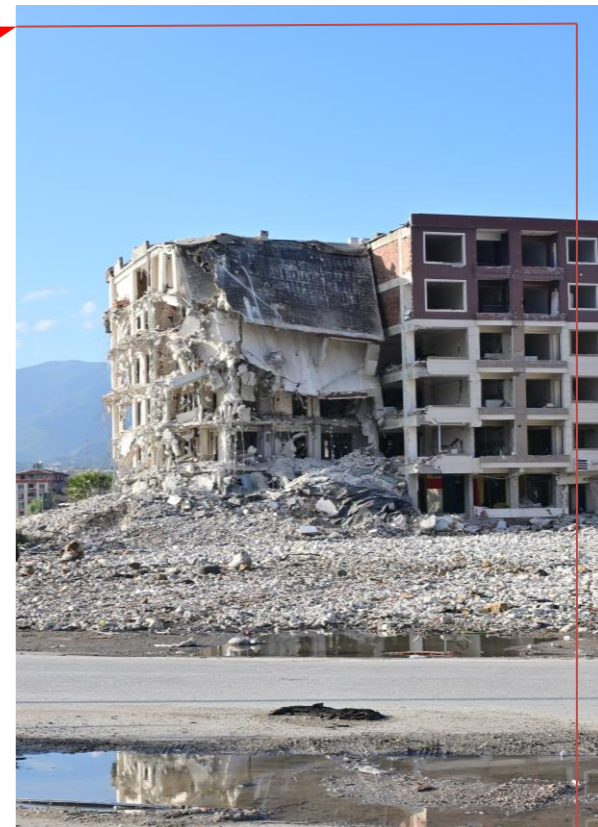
第四次派遣の概要

日程:2023年11月14日(火)~22日(水)※現地滞在6日間

派遣者:吉椿雅道(CODE 事務局長)、山村太一(CODE スタッフ)
島村優希(CODE 学生スタッフ、大阪大学4年生)
*日本災害救援ボランティアネットワーク(NVNAD)のサポートで同行

同行者:荒井俊之さん(NHK フリーランス)
協力者:藤本憲志さん(ネブシエヒル大学日本語学科講師)
木村周平さん(筑波大学人文社会系准教授)
永田真子さん(筑波大学 博士後期課程1年)
エルタン・カラビクさん(NGO Development Workshop)
トゥリン・ケシクタシュさん(NGO Hasat Hatay)
バシヤク・チャクジュさん(通訳)
メルベ・チャクナクさん(通訳)

訪問地:ハタイ県アンタキヤ、デフネ、サマンダー、イスケンデルンの被災地
内容:ハタイ県の被災地の現状把握、現地 NGO の訪問とヒアリング、新規プロジェクトに向けての調査など



ハタイ県の概要
人口:170万人程度(35万人程度のシリア難民)
産業:鉱業、農業、漁業など
特徴:1938年までフランス領シリア下ハタイ王国を経てトルコに併合
・多様な宗教・民族
・山脈からの川と平原が広がる
・8度目の大地震の被害とされる

ハタイ県の現在の状況
・トルコ・シリア地震ハタイ県死者数23,453人以上(トルコ国内で50,783人 11月15日時点)
・ハタイの1/4の建物は倒壊、もしくは深刻なダメージ
・特にアンタキヤ・デフネなどの多くの居住区がほとんど住めない状態(およそ15万人が避難生活中)
瓦礫撤去は今も続いており、洪水による二次被害や建物解体による発がん性のある石綿の健康被害も懸念される。また、建物解体に伴うアスベストが地面に染み込み、水質汚染にもつながり水不足も招いている。

被災地の声

「大統領が、この地震に対して1年で復興すると言ったが、それはもう夢で、最低でも3年はかかると思う。」
「私たちはお金持ちではないけど、自分たち自身も被災者だから誰に何が、どのようなケアが必要なのか分かる。またお互いがケアをすることが、自分たちが生きているということにもつながる」
「みんなで助け合うことで、人間としての生きる意味を感じた、ボランティアをすることが生きがいにつながっていく」
「お金より大事なことがあって、今話している時も大事で、自分たちの話を聞いてくれてありがとう。」
「なぜ、政府のコンテナハウスに入らないのですか？」と問うと「このコンテナ村の方が自然もあって、早くリカバリーすることを証明したい。AFADのコンテナハウスは、人間を人間にするためのものではない。」と述べた。



◎被災地の課題

- * 震災から2度目冬に備えた越冬対策 (テント生活者の多いハタイ県)
- * 解体工事によるアスベストなどの土壌汚染
- * 建材不足...同時の再建工事による資材不足と資材高騰
- * 仮設住宅...その土地の風土を考慮していない仮設住宅 仮設住宅に敢えて行かない人たち (コミュニティ、自然)
- * 人口流出...ハタイ都市圏人口43万人のうち、38万人が市外に
- * 多様な支援の拡充...心理サポートの手厚いがそれ以外の支援は?
- * 被災地間格差... ハタイの取り残され感(未だ緊急期を脱していない)

若者が見た被災地

～トルコ・シリア地震の被災地ボランティアを通じて～

CODEは、これまでの被災地派遣で出会ったトルコの学生ボランティアたちと、日本の若者が交流することによって、災害多発国である両国で互いに災害やボランティアなどについて学び合いができるのではないかと考え、トルコの若者と日本の若者によるオンラインでのボランティア交流会を行ってきました。

そして、この2023年10月19日～26日に、若者5名がトルコの被災地に訪れました。目的は、トルコの若者と日本の若者でボランティアについて学び合い長期的なボランティアの在り方について考える。更にこの若者の交流を通して、より多くの日本とトルコの若者が被災地と継続的なつながりを形成することです。

トルコのボランティアや若者との交流を通じて被災地とつながり、防災やボランティアについて若者それぞれの視点で考えました。



- 日程: 2023年10月19日(木)～10月26日(木) 8日間(現地5日間)
- 訪問場所: トルコ共和国 (イスタンブール、ガジアンテプ、アディヤマン、ヌルダ、カフラマンマラシュなど)
- 活動: アディヤマンのNGO、İz Derneğiのボランティアとの交流、CODEのカウンターパート、ACEVの「子どもと家族のケアセンター」視察と活動、ガジアンテプの中学校での交流、日本のメッセージを書いた「うちわ」を届ける、イスタンブールでの学生交流、ボランティア交流など
- 参加者: 植田隆盛(関西学院大学総合政策学部4年)
島村優希(大阪大学人間科学部4年)
那須公香(大阪大学外国語学部4年)
近藤明日花(関西学院大学人間福祉学部1年)
- 同行者: 山村太一(CODEスタッフ) 吉椿雅道(CODE事務局長)



～スケジュール～

日程	場所	内容
10/20(金)	ガジアンテプ	•Aydınlı中学校で防災ワークショップ「非常用持ち出し袋を考えよう」を実施 •カウンターパートのMehmetさんたちのヒアリング、ボランティア交流会
10/21(土)	アディヤマン	•NGO「İzDerneği」とアディヤマンの街の視察 •仮設住宅に暮らしている被災者のヒアリング •NGO「İzDerneği」の活動である「子どもたちの支援」に同行 •NGO「İzDerneği」のNusretさんたちのヒアリング



日程	場所	内容
10/22(日)	カフラマンマラシュ	「Koç Holding Umut kent gençlik eğitim merkezi」(青少年トレーニングセンター)で防災ワークショップ「非常用持ち出し袋を考えよう」を実施
10/23(月)	ヌルダ イスタンブール	•「ACEV」の子どもと家族のケアセンターでワークショップ「防災ダック」を実施 •ボアジチ大学日本語学生団体と交流防災ワークショップ「防災クロスロード」の実施
10/24(火)	イスタンブール	•イスラム文化施設などの訪問 •NGO「Collective Coordination」のYusufさんやボランティアとの交流



～若者の視点(一部抜粋)～

印象に残ったのは、アディヤマンを訪問し街の視察をしたことだ。被災地に行ったことがない私にとって、街の建物が倒壊していたり、狭い仮設住宅が並んで、そこで窮屈な生活している人たちが大勢いたりする様子は、大きな衝撃を与えた。同時に、お話を聞く以外に何もすることができない自分の非力さを実感した。一方で被災された方々は、辛い状況下の中、私たちを笑顔で迎え入れてくださり、お話を伺ったりワークショップをした後には必ずお礼の言葉を述べてくださった。何もできないとやるせなさを感じていた私にとって、その言葉は励みになっていた。今回の活動で感じた現地の人たちの温かさや力強さ、そして被災地で受けた衝撃を忘れてはいけないと思う。引き続きの活動を通して、ボランティアとしてできることやその活動の意味を見出していきたい。(近藤明日花)

印象に残っているのは、NGOの「İzDerneği」の方が、震災から約8ヶ月の間、被災地を訪れるボランティアの数が減少している中で、CODEが被災地のことを忘れず、来てくれてありがとうと仰ったことであった。この言葉を聞いて、「無知」であることよりも「無関心」であることの方が怖いと思った。被災地の状況についても知らないことばかりだが、それでも関心だけは持ち続けたいと思った。(那須公香)

直後に行った2月のときと比べると町の様子は一変して、もう普段通りの生活が戻っているのではないかと錯覚するほどだった。しかし、「夜ゆっくり眠れない」、「今にも揺れ始めるのではないかと心配している」と言われたり、子どもが燃えた建物の絵をうちわに書いていたりしたのを見て、人々の心の中ではまだ終わっていないんだと気付かされた。その中で、神戸の震災の時にはどう乗り越えたのか聞かれたり、ボランティア活動を続けている人をみてどうにか乗り越えようとする人々の力を感じた。そして、「自分たちが一人じゃないと気づかせてくれてありがとう」と言われたときにはCODEが大切にしている最後の一人までの大切さを身をもって実感することが出来た。(植田隆盛)

企画段階では、本当に今自分達が被災地に行くことに意味はあるのだろうか、という不安もあった。しかし、アディヤマン(市の建物の少なくとも1/4は解体予定で、多くの住民が別の地域へ避難している)のNGOのNさんが「皆去っていく中で、日本から来てくれてありがとう」という言葉を聞いた時に、直接的なつながりをつづけ、この災害について現地の人びとと共に記憶していくことが、被災地のために自分ができる一つの大切なことであると感じた。(島村優希)

トルコと日本の若者同士の現在の「つながり」、これまでの日本とトルコの歴史からの過去の「つながり」、そして若者だからこそ、さらにその下の世代につなげるための未来の「つながり」、この「つながり」を意識して活動に励んだ。活動をしていく中で、様々な「つながり」を感じることができた。このプロジェクトに拠出して頂いたCODEとコープこうべさんとの「つながり」、これまでCODEが活動したことによってできた「つながり」、そして私たちがトルコに行くことによってできた「つながり」。今後もトルコと日本、物理的な距離は遠いがお互いが助け合える、CODEの理念でもある「困った時はお互い様」の精神が続けられるように励みたい。そして、このプロジェクトは、これで終わりではなく、帰ってきた私たちの今後の行動によって、本当に行って意義のあるものになったのかが問われているのだと考える。(山村太一)

～全体を通して～

まずは、本事業にご理解いただき、若者たちの活動に資金を提供していただいたコープこうべの皆さま、ハート基金運営委員の皆さまに深く感謝を申し上げます。

本事業を実施するに至った経緯は、2月に発生したトルコ・シリア地震後に、被災地で出会った学生などの若いボランティアたちとの出会いであった。被災地にはトルコ全土からたくさんの方々がボランティアたちが駆けつけていて、1995年の阪神・淡路大震災を想起させるものがあった。だが、現在、なぜか被災地で活動するボランティアやNGOは大幅に減少している。また、ボランティアのありようも日本とは違う事も見えてきた。そんな問いから本企画が始まった。

本企画では、トルコとの連絡調整など事前の準備もすべて若者自身が行い、トルコの被災地へと向かい、現地での運営もすべて若者自身が主体的に行った。参加した若者たちの状況も様々で、トルコの被災地に初めて訪れる人たちは、その街の状況や被災者やボランティアの言葉に衝撃を受けて、自分が来た意味を自身に問いかけていた。他方、これまでのCODEの現地派遣に同行した人たちは、最初の時に感じた無力感だけで終わらせたくないという思いを持って被災地に向き合おうとしていた。

学生が一度や二度行ったところで、何も出来ない、分からないかもしれないが、若者たちが9か月経った被災地に行って、被災地の人たちに会い、言葉を交わした中で確実に被災地の人たち、ボランティアたちに希望を与えていた。いくつかの場所で出会った人々から言われた「来てくれてありがとう」という言葉がそれを物語っている。そして先述の感想にもあったように5名も若者たちの中で次へのそれぞれの一歩が始まろうとしている。(CODE事務局長 吉椿雅道)

イベントレポート

トルコ・シリア地震 「若者がみた被災地」 報告会

約9ヶ月前に発生したトルコ・シリア地震。死者が5万人に上る甚大な被害をもたらされた被災地では、今もなお多くの方が避難生活を送られています。日本と同様に、地震の多発する国であるトルコでも多くの学生が現在この災害の支援活動に携わっています。そのようなトルコと日本の学生ボランティアたちがつながることでお互いに学び合いたいと思い、トルコ・シリア地震の被災地を10/19から10/26のCODE未来金の若者5名が訪れました。トルコのボランティアや若者との交流を通じて被災地とつながり、防災やボランティアについて若者それぞれの視点で考えました。本報告会では、現地での活動報告と共に、活動の中での若者たちの想いもお話ししました。

開催概要

若者がみた被災地

～トルコ・シリア地震の被災地ボランティアを通じて～

日時：2023年11月12日(日) 午前10時～午前12時

報告者：吉橋雅道、山村太一、島村優希、植田隆誠、近藤明日花、那須公香

開催：オンライン

参加者：70人

主催：CODE海外災害援助市民センター、CODE未来基金

共催：コープこうべ



参加者の声

・知り合いに誘われて参加したので、初めから関心を持っていたわけではありませんでしたが、参加して同年代の方々のお話を伺い、自主の無関心を恥ずかしく思いました。参加してよかったです。また、話し方に皆さんの実感がこもっており、こうしてお話を聞いても、実際に参加した人にしかわからないことがあるのだらうと感じました。貴重なお話をありがとうございました。(20代大学院生)

・学生さんたちの言葉一つひとつがとても心に沁みました。無力感、でもそれで終わってはいけない。配慮は必要だけど遠慮はしない方がよかったです… 真摯に向き合われたからこそ気持ちだなぁと胸に響きました。そして、こういう機会を作られていること自体、ボランティア活動を次世代につなぐとても大切な取り組みで素晴らしいと思いました。(50代社会人)

・私は被災地支援を経験したことがなく、参考にさせていただきたいと感じ、今イベントに参加しました。皆さん、現状から実際に地元の方と触れ合っただけで感じたこと、改善すべきことがスライドと口頭の説明で分かりやすくなったのが良かったです！私も日本の災害ボランティアに挑戦してみたいと思いました。(10代学生)

・吉橋さんが最後に言われた「『学生が被災地に行っても意味がない』という正論にどう大人が向き合うか」という言葉に胸を打たれました。私も当初は上記の意見派でしたが、常識にとらわれずに動いてくれる大人がいるから学生が活躍できるんだと思直しました。私も30年後くらいにそんな大人になれるよう、今のうちに色々挑戦しておきたいです。(20代学生)

皆さんの想いがこもった貴重な経験を拝聴できました。現地に行けない私たちの耳と眼になってくださり、ありがとうございました。たくさん気づきがあったことは、これからの皆さんの活動に繋がることと思います。(50代社会人)

・チャットでも感想を述べましたが、阪神・淡路大震災から29年、大震災の経験のない若者が、CODEの活動を通じて、支え合うことの大切さを感じ取ってくれていることに、頼もしさを感じました。とても良いイベントでした。これからの活動が楽しみです。(70代社会人)

・途中までしか参加出来なかったのですが、私が昨年ウクライナ避難民ボランティアに行った際に感じたことに似た感想を持っている方が多く嬉しく思いました。特に関心を持ち続けることの難しさや大切さの部分は、無知よりも無関心の方が恐ろしいいつも思っているの、大変共感しました。「僕の家も火事があった」という子どもの発言ではとったという声も、よくわかります。トラウマがあることを理解しているつもりでも、現地で現実を聞いたり見たりするからこそ感じてくるものがあります。(20代学生)



トルコ・シリア地震 第四次派遣 報告会

開催概要

「トルコ・シリア地震 第四次派遣報告会」

日時：2023年12月5日(火) 18:30～20:00

報告者：吉橋雅道(CODE事務局長) 山村太一(CODEスタッフ)

島村優希(CODE学生スタッフ、NVNADのサポート)

開催：オンライン

参加者：21人

主催：CODE海外災害援助市民センター

今年の2/6にトルコ・シリア地震が発生し、9か月以上が経過しました。5万人以上の人びとが亡くなり、甚大な被害をもたらされた被災地では、冬が近づき気温が下がる中、今でも多くの方が避難生活を続けています。
 CODE海外災害援助市民センターは11/14～11/21の間、トルコの被災地の中で復興が遅れるハタイ県にて第四次派遣を行いました。本報告会では現地の状況や現地NGOの方々から聞いたお話と共に、今後のCODEの支援についてお話ししました。



新入生歓迎キャンプ

開催概要

「CODE新歓イベント～キャンプでつながる～」

日時：2023年11月25日(土)～11月26日(日)

開催場所：大野アルプスキャンプ場

参加者：9人

主催：CODE海外災害援助市民センター、CODE未来基金

参加者の声

・CODEの皆さんとのキャンプは心に残る楽しい体験でした。キャンプ場は自然に囲まれた美しい山々の中のキャンプ場で、昼間は紅葉を楽しみ、夜は都会では見られないような星空の下で焚き火を囲みました。みんなでキャンプ場を整えたり、火おこしたりすることで、ボランティア活動で得られるものとはまた異なる達成感を感じました。さらに、人生の先輩である仲間との焚き火のひと時は、自分の将来や国際協力の在り方について再考する貴重な時間を過ごしました。リフレッシュの場でありながら、様々な学びを得られる素晴らしい2日間でした。

・CODEのキャンプでは、マッチやチャッカマンは禁止です。私は今回で3回目の火おこしでしたが、それでもかなり時間がかかってしまいました。街の便利な生活は当たり前のことじゃないんだと教えてもらっている気がします。「防災を学ぶことは自然を学ぶこと」だと吉橋さんは言います。災害が起こると電気もガスも水も使えないかもしれない。そんな中で自分は生き延びていけるのか、自然の大きさを本当に分かっているのか。楽しいキャンプの中で様々なことを考えさせられています。

・今回はCODEさんのキャンプに初めて参加させて頂きました。キャンプ自体が初めての体験で最初は不安でどうしようかと思いましたが、キャンプ場に着くと、料理、火起こし、プラネタリウムなど他にも沢山楽しいことがあったので不安は吹き飛びました！今回のキャンプに参加して、今までにない経験ができてとても良かったです！



- 水色の枠線.....切れてはいけない要素(文字やロゴ等)をいれる範囲
- ピンクの枠線...仕上りのサイズ
- みどりの枠線...フチなし印刷にする場合、背景を伸ばす範囲

★★★ PDFに変換して入稿される場合 ★★★
 「表示」>「スライドマスター」画面より色つきのガイド線を消してから変換してください

冊子のデータ製作について

- ・ページ数は表紙も含めた数になります
- ・データは1Pごとでも見開きでもご入稿頂けます
- ※見開きの場合はページ順どおりにご作成ください
- ・白紙のページがある場合はコメント欄にご指示ください

イベントレポート

イベント告知

CODE寺子屋セミナー2023

開催概要

CODE海外災害援助市民センターが、近畿労働金庫と関西NGO協議会が連携し標記セミナーを開催します。昨今の災害・気候危機、紛争・戦争、感染症などが世界各地で頻発し、様々な情報が錯綜するグローバル社会で、私たち市民は何を想い、何を大切に次世代へとバトンをつないでいかなければいけないのかを考えます。詳細は以下の通りです。

日時 2024年1月13日(土)13時30分～15時30分

場所 近畿ろうきん肥後橋ビル12階メインホール

大阪市西区江戸堀1-12-1

大阪メトロ四つ橋線「肥後橋駅」10番出口すぐ

京阪電車中之島線「渡辺橋駅」7番出口より徒歩5分

テーマ 災害・紛争…混とんとした時代に私たちはどんな未来を選ぶのか～阪神・淡路大震災30年を目前に～

講師 安田菜津紀さん(認定NPO法人 Dialogue for People 副代表)

参加費 無料

定員 70名(先着順)

トルコ・シリア地震を経て阪神・淡路大震災 原点から学ぶ

開催概要

日程: 1月15日18時～21時

場所: CODE事務所(兵庫県神戸市兵庫区中道通2-1-10)

講師: 村井雅清

無料、対面のみ。若者が中心の勉強会です。

内容:トルコ・シリア地震が発災し、支援していく中で被災者の方に「阪神・淡路大震災のKOBEは、どうやって復興したんだ？」とよく聞かれました。その度に、私は阪神・淡路大震災のことを何も知らないと思わされます。

また、阪神・淡路大震災はCODEができたきっかけでもあり、原点です。

このような背景から、もう一度原点である阪神・淡路大震災のことを学び、その学びからトルコ・シリア地震との共通点や今後の復興の展開へとつなげていけると考え、勉強会を企画しました。

ご興味ありましたら、是非ともご参照ください。

ひょうご安全の日のつどい

開催概要

日時:2024年1月17日(火)10:00～16:00

場所:HAT神戸(兵庫県神戸市中央区臨浜海岸通1丁目5-2)

内容:阪神淡路大震災から28年を迎えて、「震災を風化させない」をテーマとして「ひょうご安全の日のつどい」が開催されます。

CODEもブース出展し、トルコ・シリア地震のことを主にパネル展示します。また、現地でもよく飲まれているトルコ紅茶を販売する予定です。是非とも立ち寄ってみてください。

主催:ひょうご安全の日推進県民会議

スタッフ活動記録(9/1～11/30)

9/4	トルコ・シリア地震学生企画ミーティング(島村さん、植田さん、近藤さん、那須さん、山村、吉椿)
9/6	ウクライナ人の引越しサポート(村井理事、近藤さん、山村、吉椿)
9/7	筑波大学院生永田さんとトルコ・シリア地震の打ち合わせ(吉椿) NGO,ACEVのハサンさんとミーティング(ハサンさん、岩城あすかさん、吉椿)
9/8	コープこうべ「地域でつながるフォーラム」でブース出展(山村)
9/12	緊急人道支援学会設立シンポジウムに参加(吉椿)
9/13	JICA関西で神戸女子大学「神戸と防災」の講義(吉椿)
9/14	JICA関西、国際協力入門セミナーに登壇(吉椿) フードドライブ譲渡会&交流会に参加(山村)
9/16	南丹市「防災シンポジウム」で講演(吉椿)
9/18-21	お熊甲祭りに参加(植田さん、山村、吉椿)
9/22	たつの市立御津小学校で講演とうちわ作成(山本健一さん、植田さん、島村さん、山村、吉椿)
9/23	トルコ・シリア地震学生企画ミーティング(島村さん、植田さん、近藤さん、那須さん、山村、吉椿)
9/27	コープこうべ2023年度第2回平和企画の会で講演(吉椿)
9/29	FMわいわい「トルコ風炊き出し食」にブース出展(山村、吉椿、植田さん) CODE9月度理事会
9/30	静岡県ボランティア協会「トルコ・シリア地震とCODEの支援」で講演(植田さん、山村、吉椿)
10/4	トルコ・シリア地震学生企画ミーティング(島村さん、植田さん、近藤さん、那須さん、山村、吉椿)
10/10	コープこうべと報告会の打ち合わせ(山村) トルコ・シリア地震学生企画ミーティング(島村さん、植田さん、近藤さん、那須さん、山村、吉椿)
10/11	コープこうべ総代会交流会に出席(吉椿) 水墨画協会、向山さん来所(山村、吉椿)
10/12	神戸新聞取材(吉椿)
10/15	第27回「国際現代」芸術展 主催「国際現代」水墨画協会にて授賞式とうちわ受け取り(島村さん)
10/16	トルコ・シリア地震学生企画ミーティング(島村さん、植田さん、近藤さん、那須さん、山村、吉椿)
10/17	神戸女学院大学、桑名さん(ボランティア)来所(吉椿) 近畿ろうきんと寺子屋セミナーの打ち合わせ(吉椿)
10/18	NHK取材(吉椿) 関西学院大学千里国際高校、吉田さんヒアリング(吉椿)
10/19-26	トルコ・シリア地震学生企画でトルコへ渡航(島村さん、植田さん、近藤さん、那須さん、山村、吉椿)
10/30	神港橋高校タウンミーティングで講演(山村、吉椿) トルコ・シリア地震学生企画ミーティング(島村さん、植田さん、近藤さん、那須さん、山村、吉椿)
10/31	トルコ・イズデルネイと打ち合わせ(島村さん、植田さん、山村、吉椿)
11/1	NHK取材(吉椿)
11/4	阪神・淡路大震災1.17伝承合宿に参加(村井理事、吉椿)
11/6	兵庫県立大学本庄さん、トルコのヒアリング(吉椿) トルコ・シリア地震学生企画報告会(コープこうべ)を開催(島村さん、植田さん、近藤さん、那須さん、山村、藤本さん、吉椿)
11/12	
11/13	ネブシェヒル大学オンライン交流会で発表(島村さん、植田さん、近藤さん)
11/14-22	トルコ・シリア地震第4次派遣(島村さん、荒井さん、藤本さん、山村、吉椿)
11/22	近畿ろうきんラジオカフェ「Kyoto Happy NPO」に出演(吉椿)
11/23	震災がつなぐ全国ネットワーク会議に出席(吉椿)
11/24	舞子高校「災害と人間」で講義(吉椿)
11/25-26	未来基金新歓キャンプ (高島陽菜さん、施韻さん、島村さん、植田さん、山村、吉椿)
11/27	HYOMIC(兵庫国際協働士の会)セミナー「難民から考える兵庫、私たちに」に出席(山村、吉椿)
11/30	関西国際大学「アジアにおける市民防災エンパワメントプログラムの共同開発」の打ち合わせ(吉椿)

※その他、
 週一で、とびまつ中学菜園(須磨)での畑作業
 週一で、神戸学院大学「社会防災徳部講義」を担当

- 水色の枠線.....切れてはいけない要素(文字やロゴ等)をいれる範囲
- ピンクの枠線...仕上りのサイズ
- みどりの枠線...フチなし印刷にする場合、背景を伸ばす範囲

★★★PDFに変換して入稿される場合★★★
 「表示」>「スライドマスター」画面より色つきのガイド線を消してから変換してください

冊子のデータ製作について

- ・ページ数は表紙も含めた数になります
- ・データは1Pごとでも見開きでもご入稿頂けます
- ※見開きの場合はページ順どおりにご作成ください
- ・白紙のページがある場合はコメント欄にご指示ください

会員・寄付者 ご芳名(五十音順、敬称略)

8月31日から11月30日
*NL掲載不要者 削除済み

【会費】

芹田健太郎、宮本匠、熱田典子、石東直子、小竹貫介、鎌倉千俊、岸下正純、久保陽子、小林孝信、小林直哉、五味芳道、澤登早苗、塩谷誠、高橋智子、田中綾子、饗庭千代子、塚本謙三、津田秀子、長澤雄二郎、秦智、原田悦子、小西美子、兵頭晴喜、増田未知子、満田里美、三宅川泰子、村田昌彦、本岡秀子、山崎達枝、山崎水紀夫、山本八州雄

【ご寄付】

個人
ア行
相川(沖永)康子、安達明孝、熱田典子、飯嶋朝子、飯干大嵩、伊藤幸子、伊東伸子、大岡成樹、岡部徹、岡本誠、尾崎礼子、尾澤良平、小竹貫介、折口富美子

カ行
カトウカエデ、鎌倉千俊、川崎善子、簡佐知子、北波忠雄、木下洋子、木村卓美、木村達也、久井田浩子、國本知子、久保陽子、桑原綾子、小林アイ子、小林直哉、小牧正子、米谷啓和

サ行
坂手勝廣、佐藤朝子、讃井乃梨子、澤登早苗、塩谷誠、重元勝、住野和子、関本大介
ソラノヒシ

タ行
高野美智代、高橋智子、武田節子、田中綾子、田中圭子、谷川瑞穂、旦保立子、鄭恵姫、天使、戸上和美、都倉裕太

ナ行
長澤雄二郎、中原喜代子、仲村恵美子、中村大蔵、名越信次

ハ行
畑中裕子、濱川由香、小西美子、榛木恵子、兵頭晴喜、藤本範子、堀孝臣

マ行
マツダヨウコ、水野明代、満田里美、三原翠、三好ひろ子、村田昌彦、村山京子

ヤ行
山崎清、山科満、山田環、吉野恵子、米田幸人、米田玲子

ワ行
渡辺知佐子

【団体】

明石西高校 生徒会ボランティア部、NGO自敬寺、株式会社 箕面ビール
公益財団法人 箕面市国際交流協会、国際ソロブチミスト 神戸東、清玄寺
社会福祉法人 名古屋市昭和区社会福祉協議会



会員・寄付者 ご芳名(五十音順、敬称略)

いつも応援してくださり、ありがとうございます!

【その他(ウクライナ支援の野菜提供、トルコ・シリア地震支援(うちわプロジェクト)など】

ムラとマチの奥丹波、コープこうべみずほ協同農園、竹内由美、村上忠孝ファーム、の〜ら、旭芳郎、とびまつ中学農園、河崎紀子、満田里美、認定NPO法人日本災害救援ボランティアネットワーク(NVNAD)、龍野市立御津小学校

その他、街頭募金活動等でも多くの方々からご協力頂いています。ご支援・ご協力誠にありがとうございます!

—CODE Supporter's voice—

藤本憲志(トルコ国立ネヴシェヒル・ハジュベクタシュ・ヴェリ大 学に専任講師)さんより

今回のトルコ・シリア地震に際し、トルコはネヴシェヒル大学で被害の大きさに圧倒されながらも、なす術のない自分に無力感に苛まれていたところ元コープこうべの河崎様とのご縁で CODE の皆様が尽力されておられることに心より感謝申し上げます。第一派遣では、現地の情報もほとんどなく極寒の中、いち早く駆けつけ被災者に寄り添う姿に胸を打たれました。若者同士の交流では、刻々と変化する状況に柔軟に対応しながら自分たちで考え、実践したプログラムを実践し、交流していく若者の姿に勇気を頂きました。10 か月余り経過し、国内外のボランティアもほとんど撤退する中、活動を継続され、現地での「私たちのことを覚えていてくれてありがとう」と言う言葉を耳にする度、CODE が掲げる「最後のひとりまで」の精神が細部に宿っている事実に感動を禁じ得ません。本当にありがとうございます。そしてこれからもトルコをよろしく願っています。

藤本さん、いつもありがとうございます!

会員・寄付者各位

領収書送付の廃止について

拝啓 時下ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。日頃より格別のご高配を賜り誠にありがとうございます。

突然ではありますが、昨今の社会情勢、物価の継続的な値上げ等、諸般の事情に鑑みて、この度領収書の送付を廃止する運びとなりましたため、取り急ぎお知らせいたします。

これまで通り、領収書が必要な方は送付させていただきますので、お申し付けください。皆様には多大なご迷惑をおかけ致しますことを深くお詫び申し上げます。今後とも、CODE海外災害援助市民センターをご愛顧くださいますようお願い申し上げます。

CODE海外災害援助市民センター

- 水色の枠線.....切れてはいけない要素(文字やロゴ等)をいれる範囲
- ピンクの枠線...仕上りのサイズ
- みどりの枠線...フチなし印刷にする場合、背景を伸ばす範囲

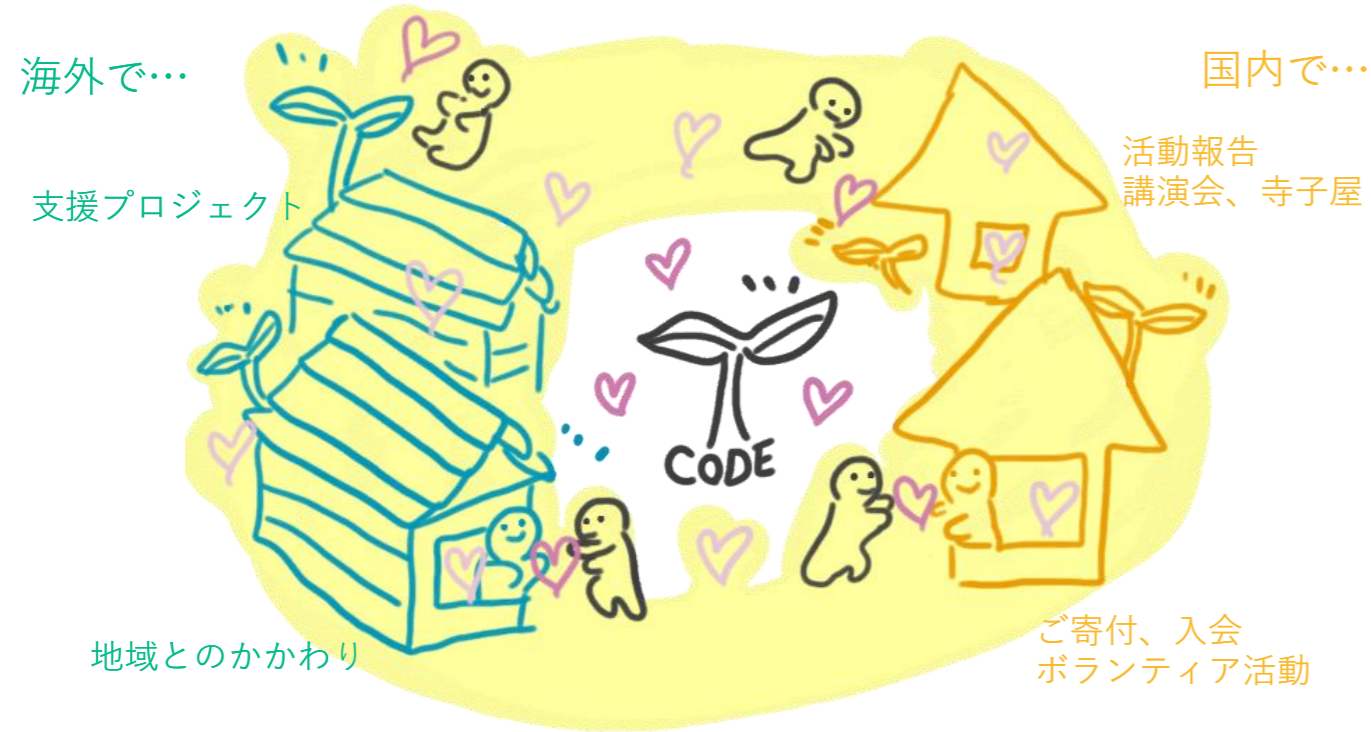
★★★ PDFに変換して入稿される場合 ★★★
「表示」>「スライドマスター」画面より色つきのガイド線を消してから変換してください

冊子のデータ製作について

- ・ページ数は表紙も含めた数になります
- ・データは1Pごとでも 見開きでも ご入稿頂けます
- ※見開きの場合はページ順どおりにご作成ください
- ・白紙のページがある場合は コメント欄にご指示ください

ご協力のお願い

みなさまからの応援があって、CODEは活動を継続できます。
お家から世界へ。CODEが支援のお気持ちを届けて、世界とあなたをつなぎます。



寄付して応援

活動を継続するためのご寄付です。
全体運営、特定の救援プロジェクトへのご寄付の指定も可能です。
25%を上限に管理運営費とさせていただきます。

ボランティアとして応援

事務所での作業や翻訳、自宅でも可能な作業などの
ボランティアを募集しています。
詳しくはCODE事務局までお問い合わせください！

知って・学んで応援

あなたの住んでいる地域で開催される講演会に
CODEスタッフを講師として派遣します。
テーマ・内容等、お気軽に事務局までご相談ください！

サポート会員になって応援

【正会員（総会での議決権あり）】

個人・学生 : 年会費 5,000円×1口以上
NPO/NGO : 年会費 5,000円×1口以上
企業・団体 : 年会費30,000円×1口以上

【賛助会員】

個人・学生 : 年会費 2,000円×1口以上
NPO/NGO : 年会費 2,000円×1口以上
企業・団体 : 年会費10,000円×1口以上

ともにCODEを創ってくださる方を
いつも募集しています

お振込み方法

■ ゆうちょ銀行
支店名：〇九九（ゼロキュウキュウ）
支店番号：099
口座番号：0330579

■ 近畿労働金庫
支店名：神戸支店
支店番号：642
口座番号：8881040（普通）
口座名義：CODE海外災害援助市民センター

【郵便振替】

加入者名：CODE
口座記号番号：00930-0-330579

【クレジットカード】

CODEのホームページより ⇒
<https://code-jp.org/donation/>



※通信欄に用途をご明記ください。(例「ウクライナ」「賛助会員」)

発行元 (特活) CODE海外災害援助市民センター

〒652-0801 兵庫県神戸市兵庫区中道通2-1-10
TEL : 078-578-7744 FAX : 078-574-0702

E-mail : info@code-jp.org
HP : <https://www.code-jp.org/>



Facebook



Twitter



Instagram